
月の船

綾瀬梨乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の船

【Nコード】

N9627B

【作者名】

綾瀬梨乃

【あらすじ】

主人公・漣のクラスでは、少し変わったシステムの「いじめ」が存在していた。そのいじめのターゲットになった漣は、“自分の番”が終わるのをじっと耐えようとするが…。

第1話　信じていたモノの崩壊

がたん、ごん。がたん、ごん。

よく耳に慣れた音を立てながら、電車がゆっくりとホームに入ってきた。

ため息をつきなが、滯はちらりと自分の腕にはめた時計に目をやった。

時刻は7時。時刻表通り、1分の遅れもない。

ドアが開き、ホームで待っていた数人が中に入っていた。降りる人はいないようだ。

滯はもう1度ため息をついて、その大きな箱に足を踏み入れた。

朝早いこともあり、車内はまだ席が空いていた。

普段なら、たとえ空きがあろうと立ったままでのだが、今日は体力温存のために座ることにした。

滯がこれから行かなくてはならない場所は、今までとは違うのだ。

ずっと、楽園とは言わないまでも、それなりに楽しい場所であったそこは、だんだんと体力、そして何より精神力がいる場所へと変わっていった。

そして昨日からは、さらに最悪の場所となってしまうた。

何かトラブルが起きて動かなくなりはいないかという滯の願いも空しく、電車は順調に進んでいった。

がたん、ごん。いつもと同じような音を立てている。滯はそっと周りの人の顔を盗み見た。

都会のように人で溢れかえる駅ではないので、毎朝同じ時間に同じ電車の同じ車両を利用していると、見知った顔が多くなる。

彼らも滯と同じように、毎朝変わらないことをしているのだ。

そんな彼らの顔は、やはりいつもと変わらないような表情をしていた。

心の中も、いつもと変わっていないのだろうか。こんなに憂鬱なの

は自分だけで・・・。

いや。滯はすぐにその考えを否定した。

きっと自分も表面上はいつもと変わらぬ顔をしているだろう。

人の心の変化など、簡単にはわからない。それに、悩みがない人など決して多くないことも、滯は知っていた。

小学校の頃などは、こんなに色々悩んでいるのは自分だけで、友人にはなんの悩みがないように思っていた。

だが、どんな人にもそれなりの悩みがあるのだ。

きっと、自分より重大な悩みを持つ人など数多くいるだろう。

滯の悩みには、解決策があった。

とても消極的な解決策。それは、学校に行かないこと。

様々な考えを頭に巡らしているうちに、気づけば車内は先ほどより混んでいた。

どうやら既に何駅かに止まり、人を乗せていたらしい。

滯は首だけで後ろを向いて、窓の外を確認した。

そこには見慣れた景色が広がり、次の停車駅で降りなければならぬということが分かった。

本当にずいぶんと長い間、意識が別の世界に行っていたらしい。

程なく電車は駅に止まり、滯はゆっくり立ち上がった。

急いで出口に向かう人たちに逆らうように、ノロノロと歩いていくものの、そこは大して広くない駅のこと、すぐに改札口に着いてしまった。

駅から滯の通う学校までは、どんなに足の遅い人でも10分で着く距離だ。

そろそろ覚悟を決めなければならぬ頃だった。地獄へと行く覚悟。たった4日の辛抱だから、と自分に言い聞かせて、滯は足早に学校に向かった。

学校に着いたのは7時30分だった。

登校時間は8時20分だから、まだ1時間近く余裕がある。

今までこんな時間に来たことなど1度もなかった。

校門を抜けて昇降口に着くと、靴箱の代わりに自分のバックを開けて上履きを取り出した。

それを履くと、まっすぐに教室に向かった。

滯の所属する2-1の教室は4階の隅にある。

教室のドアを開けると、中にはまだ誰もいなかった。

ほっと胸を撫で下ろしながら自分の席に着こうとして、滯は異変に気がついた。

自分の席があるはずの場所には、何もなかった。

やはり昨日、机の中にあったすべての教科書を持ち帰ったのは正解だったらしい。

机はどこへ行ったのかと少し不安になったが、それはすぐに見つかった。教室の一番うしろ。

昨日帰る前に自分で後ろに運んだ覚えがあるので、掃除の時滯の机だけ元の場所に戻されなかったのだろう。

机を本来の位置に直し、少し考えてからトイレに行くことにした。

今日は移動教室がないので、トイレにさえ行かなければ自分の席を離れずにすむ。

そうすれば何かを盗られる可能性は少なくなる、と考えたのだ。

その代わり、自分に向けられた嘲笑の声を聞き続けなくてはならなくなるのだが。

滯は今いじめのターゲットとなっていた。正確には昨日から。

このご時世、いじめは決して珍しくないだろう。

集団リンチなどはせずに、ただ持ち物を隠したり、話しかけても無視するといった古典的な手段を使うだけの滯のクラスは、それだけを考えれば「まだマシ」だと思われるに違いない。

だが、このクラスで行われているいじめは、多くの人が想像するであろうものとは少し違った。

いじめのターゲットが一週間ごとに変わるのだ。

いじめというより、むしろゲームに近い感覚なのかもしれない。もしかしたらそのような体系のいじめも少なくないのかも知れないが、滯にとっては信じられなかった。

この数ヶ月で、今まで信じてきた多くのものが崩れてしまった。そしてターゲットとなったこの一週間、さらに自分の考えが甘かったことを思い知らされるだろう。

トイレから帰る途中、教室の中に人影を見つけ鼓動が速くなった。そっとドアを開けると、そこにいたのはクラスメートの一人、佐納香澄だった。

このクラスになって半年以上たつが、彼女とはほとんど話したことがなかった。

彼女はいつも友人の室家梨奈と一緒にいた。佐納なら無害だ。

そう思って少し安心したが、きっと、もうすぐどんどんクラスメートがやって来る。

このいじめをリードしている人たちが来るまでは、特に困ることは起きないだろうが、それでも誰も滯に挨拶はしないだろう。

何もすることがないので、本を読むことにした。どこまで集中できるか分からないが、少しは現実逃避ができる。

滯はもともと読書が好きだったが、そのことを知っているのはこの学校にはいない。

なぜか読書好きは真面目だと思われる。

それは滯にとって歓迎すべきことではなかった。

だから学校に持っていくのはファッション雑誌だけで、本は家で暇な時に読むことにしていた。

もちろん、その話は学校ではしない。

だんだんと教室に人が集まってきて、それぞれ仲の良い者同士でおしゃべりを繰り広げていった。

滯はなるべくその話を聞かないようにしていたが、自分に対する悪意の声は、なぜか容易に耳に入ってくる。

「ねえねえ、相田見てよー。朝から1人で本読んでるなんて暗っ。」

「ホントだ。佐納さんみたいじゃん。」

「でも相田は佐納さんみたいに頭良くないから!!」

「あははっ。言えてるー。」

滯にとって、会話の内容よりも、今まで自分のことを「滯」や「みー」と読んでいたクラスメートたちが、急に「相田」と呼ぶようになったことの方が悲しかった。

だがそれも1週間の辛抱だった。今までのターゲットたちも、週が変わりターゲットが変わるとすぐに、元のように呼ばれるようになった。

そして、それまで所属していたグループに戻り、またどうでも良いような話をして笑いあうのだ。まるで何事もなかったかのように。

ホームルームが始まる数分前になると、皆一気に教室にやってきた中には朝練をやっていた者もいるが、ほとんどは遅刻ギリギリで走ってきた人だ。

実は先週までは滯も、ギリギリで教室に駆け込むことは日常茶飯事だった。

学校に行きたくない葛藤と戦う所為もあったが、なにより滯は朝が弱かった。

親に叩き起こされるまで、なかなか起きられない。

だから今日6時に起きてキッチンに行った時は母にすごく驚かれた。そして、何も知らない母は「これから毎日こうだと助かるわー」と言って無邪気に喜んでいた。

結局滯は誰とも話さないまま、授業が始まった。

このクラスでは、授業中にメールか手紙の交換をしている人が半分以上、ずっと夢の世界に行っている人が4分の1、残りの4分の1が真面

目に授業を聞いている、といった配分となっている。

授業中おしゃべりをすれば当然注意されるが、メールや手紙は黙認している教師が大半だ。

余計な口出しをして厄介なことになったら困る、とりあえず静かにしていてくれれば良い。

きちんと聞きたいヤツだけ聞いていてくれ、とでも思っているのだろう。

いつもなら滯も友人たちとメールするのだが、今日は誰からも来なかったし、また自分で送る気もなかった。たとえ送っても、無視されるであろう。

いや、無視されるだけならまだ良いが、休み時間に皆にそれを話されたら、何を言われるか分かったものではない。

だが、返事が返ってくる可能性もあった。

メールなら削除してしまえば誰にも分からないのだ。

もしかしたら、そのうちに特に仲の良い2人の友人――少なくとも、今までは良いと思ってきた友人――がメールをくれるかもしれない。辛いだろうけど頑張っただね、といった励ましの言葉を綴ったものを。甘いのかも知れないが、滯はまだ友人たちを信じていた。

滯とその2人は常に行動を共にしており、3人のうちの誰かがターゲットになったのは、今回の滯が初めてだった。

今までは特に仲が良い訳ではない人だったからイジメに加わったけれど、今までずっと一緒にいた友人がターゲットなら、あからさまな味方はしなくても、影で支えてくれるかもしれない。そう考えると滯は少し元気が出た。

午前中は何事もなく平穏に過ぎ去った。

いつもと違うことと言えば、滯は学校に着いてから1言も声を発していないことだけだった。昨日は休み時間になるたびに、どこから自分の悪口や自分に向けられているだろう笑い声が聞こえてきた。

だが今日は皆昨日見たテレビの話や、好きなアーティストの話など、漣には関係のないことばかりだった。

ずっと緊張していた漣は肩透かしを食らった気分だったが、まだ気は抜けなかった。

最大の勝負は昼休みなのだ。

昼休みになると、皆それぞれのグループに分かれてご飯を食べ始めた。

だが、イジメが始まってから、毎日必ず1人だけ、1人で食べる人がいた。

当然ターゲットだ。

不思議なことに、ターゲットが普段は2人組でいる場合、残った片割れは他のグループと一緒に食べた。

漣が仕方なく1人で自分の机で食べようとすると、思いがけず頭上から声が降ってきた。

それは漣がもっとも聞きたくない、紺野紗織の声だった。

「相田さん。悪いんだけど、席使わせてくれない？ 私たち6人で食べたいんだけど、場所なくてさ。」

「あ、うん。いいよ……。でも代わりにどこか空いてる席ある？」

「え、ごめーん！ 分かんない。でもこの席使っていいんだよね！ ありがとう！」

紗織はそう言って、漣を追い出すようにイスを引いた。

漣は空いている席を探したが、見つからなかった。

そんな筈はないと思い教室内をよく見渡すと、確かに1つ誰も座っていない席があったが、その席には山のように教科書やプリントが積みまわっていた。

仕方がないので屋上に行くことにした。

屋上なら、少し肌寒いだろうが、そのおかげで人は少なく、人目を気にせず食事ができるだろう。そう考えてのことだった。

だが、教室を出てすぐに後悔をした。教室からいなくなれば、自分の机や持ち物がどうなるか分からなかった。

教壇に座るか、立ったままでも良いから教室にいるべきだったのだ。今から戻ろうかと考えたが、誰がどんなことをするのか知るのが怖かった。

もしいたずらの現場を目撃してしまったらと思うと、足がすくんで動けなくなった。

それならすべてが終わってから帰った方が良いと、やはり屋上に行くことにした。

屋上は予想通り空いていた。漣は適当な所に腰を下ろし、母が作ってくれた弁当を食べ始めた。

友達の中には毎日コンビニで昼食を買ってくる子もいるが、漣の母は毎日手の込んだ弁当を用意してくれる。

一緒に食べる友人たちに羨ましがられ、中身を交換することも多かった。

漣の弁当は人気で、そんな弁当を作る母を誇りに思うとともに、とても感謝していた。

だから、どんなことがあっても残さずに食べた。

だが、一人で食べるということは想像以上に寂しかった。

いつもはおしゃべりをしているせいで中々動かない箸も、今日はただ黙々と動かすしかなかった。

そして、食欲がでないのではないかという心配を裏切り、食事はすぐに終わってしまった。

どんな時でも食欲だけはあるのかと、少し自分が悲しくなったものの、ご飯を食べて少しだけ元気が回復したような気がした。

屋上に1人でいても何もすることがないので、漣は教室に戻ることにした。戻ってみると、紺野の姿はなく、以外にも漣の机は普段と変わらなかった。

机の上に置きっぱなしにしてしまった筆箱もそのままだし、落書きもされていなかった。

机の中をのぞいて教科書を確認したが、それも異常はないようだ。漣はかえって不安になった。

自分を油断させておいて、最後にひどいことをするつもりなのだろうか。

それとも、自分は何か重大なことを見逃しているのだろうか。

漣ははっと顔を上げて、机の横に掛けてあったバックの中を漁った。目当てのものはすぐに見つかった。財布。

ほっとため息をついた。

このイジメでは、財布などの貴重品を盗らないことは暗黙のルールだった。

それが今破られたのかと思ったが、財布はちゃんと無事だった。やはり何もされていないのだ。

漣は多少の不安は残しつつも、どうせなら、とトイレに行くことにした。

それがどんなことを引き起こすかも知らずに。

漣がトイレから出ようとドアの鍵に手を掛けた時、外から声が聞こえた。

その声を聞いて、漣はその場で固まってしまった。その声は、よく耳に慣れたもの。

特に仲が良かった2人、麻理子と理沙のものだった。

「漣さ、ターゲットになって超いい気味だよね。」

「そうそう。あいつムカつくんだよね。いい子ぶってるし。それに言いたいことはっきり言わないから、見ててイライラする。」

「八方美人って感じだよね。皆に調子いいこと言っちゃってさ。」
「私そろそろ漣に来ると思ってたんだあ。紗織たちもムカついてたんじゃない？ ホントいい気味。ターゲットずっと漣のままでいいんだけど。」

「だよね。そしたら私たちは安泰だし。」

話はまだ続いていたが、その声はすでに漣の耳には入って来なかった。

頭がクラクラしてきて、今にも座り込んでしまいそうだった。

漣は目を瞑ってドアにしがみつきのながらじっとしていた。

どれくらい時間が経っただろう。

いつのまにか声は聞こえなくなっていて、人の気配もなかった。

漣はそっとドアを開けると、そこには誰もいなくなっており、腕時計を見るとすでに授業開始5分前だった。

漣がドアを開けると、教室が一斉に静まり返った。

そして数秒後に、それまでのようにガヤガヤと話し声で溢れかえった。

これぞイジメ、という典型的な仕打ちは、少し前だったらかなり堪えただろうが、今の漣にとっては気にもならなかった。

それよりも、意識はさつき聞いた話の方に集中していた。

くずれるように自分のイスに座ると、先ほどの状況を整理しようと思死になった。

麻理子と理沙は明らかに自分を嫌っている口調だった。

なぜか。誰かが漣がトイレに行くのを見て、友人が自分の悪口を言うのを聞いて精神的なダメージを与えようと仕向けたのだろうか。

だから命令されて仕方なく、2人は心にもない会話をしたのか。

だが、漣がトイレに入ったあと、人が来た気配は感じられなかった。逆に水が流れる音を2回聞いたので、2人は中から出てきたのではないか。

だとしたら、2人は漣がそこにいることは知らなかったはず。

それならばなぜあんな会話をしたのだろうか……。漣はそれ以上考えたくなかった。

考えれば考えるほど、知りたくなかった現実を教えられそうだった。

午後の授業が始まった。

昼休みを終えて話のネタも尽きたのだろうか、あちこちから、明らかに自分に向けられているであろう笑いの声や、紙くずや消しゴムのカスが飛んできた。
だがそんなことも、もはや滞にとってはどうでも良かった。
もう何も考えたくなかった。
何も感じたくなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9627b/>

月の船

2010年11月16日08時38分発行